

Ganto Tennis**第31号**

文責：佐々木雄介

smash (動詞) ①粉々にする②強打する、ぶん殴る③(テニスで)スマッシュする

SMASH

野球のアンパイアは、ピッチャーの投げたボールが真ん中に来たとき「ストライク」と言う。strike は「打つ」「叩く」という意味の動詞。主語もなく「Strike.」と言うのだから「打て」「叩け」と命令していることになる。あれは、もしかしたら baseball の草創期、ルールも確立されていない頃の名残ではないかと想像したりする。つまり「(ど真ん中に来たい球だから) 打て」と助言・指導する言葉が、strike というアンパイアのコールになって定着したんじゃないだろうか。ただし、調べたこともないし、何の根拠もない。

strike に限らず、様々な競技で、動詞がプレーの名称として使われている。hit、catch、steal、shoot、pass、try、kick、rebound、attack、toss、pat(ゴルフ)・・・でも、テニスでボールを打つことを、strike という動詞ではなく、stroke という名詞を使って言うのはどうしてだろう。まあ、どうでもいいことだが・・・。

ところで smash はれっきとした動詞であり、辞書には「粉々にする」とある。相手のロブが浅くなり・・・Smash！さあ、あの黄色いボールをひっぱたいて粉々にしろ！

なぜか smash 練習は盛り上がる。笑顔が増え、声が出る。そして天井が目測を助けてくれる室内練習の内に少しは上達してほしいとの思いもあって、ついついこのドリルに費やす時間も多くなりがちである。「好きこそものの上手なれ」ということか、ずいぶん深くて難しいボールでも叩けるようになった。試合中にチャンスボールが来ると、ニコッと笑みを浮かべてポジションに入り、親の仇でも討つみたいに力一杯のボールを叩きつける。ミスをする、彼女にでも振られたみたいにガックリと下を向く。今はそれも、まあ、いいか、と思って見ている。smash の怖さを勉強することも大切だ。このプレーは、決めれば勢いがついて、ムードも良くなるけれど、ミスすれば、こっちに入るはずの点が相手に行ってしまうワケだから、ダメージもでかいのだ。

さて、それなら smash できるボールがたくさん来る展開に持ち込むことも考えてみてはどうなのだろう。後衛がハードヒットして、前衛のポーチで得点するイメージだけでは、なかなか smash のチャンスは訪れない。例えばロブ。対戦相手にしてみれば、smash のいいペアにロブを上げる展開は気分のいいものではない。浅くなればパコーンと決められて、盛り上がらせてしまう。それを嫌って深く打とうすると、おのずとバックアウトが増えてしまう。

間もなくシーズンイン。効果的な change of pace はどうしても必要になってくるし、そのオプションとしてはロブの展開も欲しくなる。しかし、雪が解けると smash は再び難しくなる。なにせ、外には風が吹いている上に、天井がないときているのだから。